

## アル・ハリリー「マカーマート」から解釈する R・A・シューマンの「東洋の絵」

篠原咲希音

12世紀初頭のアラブでアル・ハリリーによって書かれたマカーマート。本編—50編のマカーマは淡々と、しかし美しい響きを持って語られる。「マカーマート」とはマカーマの複数形であり、立つこと、立っていることを意味する。「マカーマート」の一編一編はある意図をもって、即ち主としてどんな騙しのテクニックを用いて相手から金品をせしめるか、それをあらかじめ決めて「人または人々の前に立つ、それを行動に移す」こと、およびその場の意味ととる(堀内 2008)。モスクや広場、学校、墓地で繰り返される語りは、日常的で、一方で異国情緒を醸し出している。

マカーマという文学形態はハザマーニーが確立し、ハリリーが大成したといわれている。マカーマートは「サジュウ」という押韻散文の文体で書かれている。サジュウ saj<sup>ii</sup>とは“鳩の鳴き声”が原義で、鳩の語尾を伸ばす鳴き声をヒントに形式化されたようだ。アラビア語の音声的特徴として、単音節と長音節の組み合わせから律格が編み出されていることや、韻とその休止後の余韻があげられる。この特徴ゆえに語られ、そして聞き手を引き込み、口頭で伝承されていくのだろう。マカーマートは、この特徴を限りなく保持しつつ文面に起こした、すなわち音を書き起こした、ように思える。実際、日本語版でも訳者はその表現に苦勞し、最終的には押韻語の箇所をローマナイズを入れ込むスタイルを取っている。そのおかげで、アラビア語など微塵もわからない私ですらそのテキストのみならず韻の鷹揚さを味わうことができる。アル・ハリリーのマカーマートはヘブライ語やドイツ語など多数の言語に翻訳され様々な地域の人々に読まれることとなったが、その都度訳者もアラビア語独特の音声表現に苦勞していたことだろう。

このマカーマートは様々なところに大きな影響を与えた。ドイツのロマン派の作曲家、ローベルト・アレクサンダー・シューマンは、このハリリーのマカーマートに着想を得て「東洋の絵 6つの即興曲」(Bilder aus Osten '6 Impromptus' Op.66)というピアノ連弾曲を作曲した。ここで私は、音声としての美しさを持ったアラビア詩を、ハリリーは文字として書き留め、それを讀んだシューマンがピアノの音で表現し、さらにその作品に「絵」という題名をつけたという“音声”と“記号”の入れ替わりに興味を持った。マカーマートはアラブ文化の中で唯一作品中に演劇性を含んでいるといわれており、時間・空間の推移が見られる。それをまた流れのある音楽として表現したシューマンは、なぜ「絵」という題名を選んだのだろうか。

そもそも、マカーマートという背景知識を抜きにして考えると、「東洋の絵」という題の曲にしては東洋音楽の特徴に弱い。アラブ音楽に特徴的な中立音程や、日本や中国の音楽に特徴的な七音音階ではなく、その上さらにポリフォニーである。また、同じように曲名に「絵」とつくピアノ曲に、セルゲイ・ラフマニノフによる絵画的練習曲「音の絵」(Études-

tableaux)やモDEST・ムソルグスキーによる組曲「展覧会の絵」(Картинки с выставки)が挙げられるが、超絶技巧といわれ拍子や調の変化に富む「音の絵」や主題を持ち雰囲気作曲によって変える「展覧会の絵」と比較すると、「東洋の絵」は“おとなしい”という印象を受ける。この曲を聞いただけで「東洋」や「絵」といった単語を連想する人はほとんどいないのではないだろうか。しかし、それこそが「マカーマート」を踏まえたシューマンの「東洋の絵」なのだと思える。演劇性があるといえど淡々としており、しかし人々を魅了する独特の余韻と高等な知識をもっている部分がハリリーのマカーマートである。シューマンは文学にも詳らかであったといい、このマカーマートという文学テキストが秘める魅力を感じ取っていたのだろう。連弾による押し引きは主人公アブー・ザイドが各地で繰り広げる駆け引きそのものであり、その一部始終をどこか俯瞰しているような淡白さとともに流れるように場面を展開していく。これが、ハリリーのマカーマートというテキストからシューマンが得た「音」の結果であるということなのだと思う。

これらを踏まえ、なぜシューマンが「絵」という題をつけたのか、私なりの考察をすると、シューマンはこれら 50 編の出来事も全て日常に根付いた些細なことで、それをくくめて一つの東洋世界だと捉えたのではないか。その上で人々の小さな関わりあいが、一つの社会・文化を形成しており、それを「絵」と表現したのだと思える。また、テキストと音から「絵」という単語を導き出したのは、ザイドが旅した土地の雰囲気や色彩をシューマンが感じ、さらに聞き手にも想像してほしかったからではなかろうか。

(1970 字)

【参考文献(インターネットで閲覧した文献\*はすべて 2019.8.8 参照)】

『ラテン語の世界』/小林標/中公新書/2006 年

『マカーマート 1~3—中世アラブの語り物』/堀内勝/平凡社/2009 年

『アラビア文学史』/H.A.R.ギブ 著,井筒豊子 訳/人文書院/1982 年

\*<原典翻訳>付説：『マカーマート』の文体サジュウについて/堀内勝/京都大学イスラーム地域研究センター/2013 年

\*『マカーマート』の演劇性 —メタモルフォシス・カタルシス・ダイクシス—/四天王寺国際仏教大学紀要大学院第 4 号、人文社会学部第 39 号、短期大学部第 47 号/岡崎桂二/2005 年

\*マカーマートの社会批判 —パロディ・サタイヤ・アイロニー—/岡崎桂二/四天王寺大学紀要第 63 号/2017 年

\*演奏表現についての考察/小澤純/文京学院大学人間学部研究紀要 Vol. 16/2015 年

\*国立国会図書館レファレンス共同データベース レファレンス事例詳細 D2006F1035

[http://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref\\_view&id=1000035433](http://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000035433)

- 
- i 投稿文ママ。正しくは「ハマザーニー」。
  - ii 投稿文ママ。正しくは「saj」。